



名古屋大学 スポーツの歩み

高橋 義雄

名古屋大学 スポーツの歩み

高橋義雄

目次

はじめに……………	2
一 戦前の高等教育機関とスポーツ……………	3
二 戦後から六〇年代の体育会……………	17
三 七〇年代の体育会……………	22
四 八〇年代以降の体育会……………	28
五 学内のイベント……………	36
六 学外に羽ばたく体育会……………	40
おわりに―これからの名古屋大学体育会……………	43

はじめに

二〇〇〇（平成一二）年現在、名古屋大学には一万五〇〇〇人以上の学生が学んでいます。そのうち学部学生のおよそ七〇〇〇名が名古屋大学体育会の会員です。そして一〇五二名が運動部に所属し、スポーツ・運動で汗を流しています。体育会運動部には、スポーツを強化する私立大学が増える昨今、東海地方の一部リーグに所属し、全国的な大会に出場する学生もいます。しかし運動部に所属する学生の減少や、多様化するスポーツのニーズに施設が不足する事態もおこっています。

本学では入学手続きの際に「地獄の細道」とよばれる通路を歩きます。そこで会費を支払い体育会会員となります。また学生会館二階の体育会室でも手続きができます。体育会運動部員だけが体育会会員と考えられがちですが、多くの学生が体育会会員です。

本書では名古屋大学の前身校である高等教育機関のスポーツ活動と、戦後の名古屋大学の体育会について紹介したいと思います。そして大学紛争や大衆消費社会の到来とともに変化する学生の体育会活動にもふれたいと思います。最後に、変容する名古屋大学と将来の大学スポー



愛知県立医学専門学校の運動会（附属図書館医学部分館所蔵）

ツについても読者の皆さんと一緒に考える
ことができればと思います。

一 戦前の高等教育機関とスポーツ

◆ 欧米スポーツ文化の輸入

日本のスポーツは、開国以来その多くが、在留外国人や招聘外国人^{しょうへい}、帰国留学生によって欧米から輸入されました。欧米のスポーツ文化は、高等教育機関でいち早くふれることができました。高等教育機関の卒業生は、スポーツ文化を赴任地へ、特に中等・初等教育機関へと伝えていきました。スポーツ活動は、一九世紀後半から二〇世

紀初頭（明治二〇～三〇年代）には、中等学校の生徒や教職員の校友会を中心に普及していきましました。各地の初等・中等教育で運動会が開催され始めるのもこのころです。

◆イベントの「運動会」から組織としての「運動会」へ

当時の大学には、体育実技として受講するような正課体育はありませんでした。しかし学生の自発的なスポーツ・運動は奨励されていきました。スポーツは、学生の結束を高めるよい機会となっていました。「運動会」ということばは、帝国大学（東京大学）創立直後の一八八三年に御殿下運動場でおこなわれた学生の陸上運動会（「競走及其他ノ競遊会」と、翌年に隅田川でおこなわれた水上運動会（「走舸組大競漕会」）が語源となり、スポーツ大会の呼称として使われるようになりました。毎年実施される帝国大学の水上・陸上運動会をマネジメントする機関として一八八六年に「帝国大学運動会」が設立しました。「帝国大学運動会」は、毎年運動会を開催し、学生に対して各種スポーツ用具の貸し出しサービスをおこなっていました。帝国大学の「運動会」は、全国的にも珍しく一九三四（昭和九）年に財団法人化して、同好の士の集まりによる運動クラブとそれを束ねる会となりました。

明治中期には、東京帝国大学以外に、一八九六年に高等師範学校（現筑波大学）「運動会」が、一八九二年に「慶応義塾体育会」が設立され、スポーツの学内戦や対校競技会が開催されるよ

うになりました。これらの「運動会」は、学内スポーツ大会を開催する現在の名古屋大学体育会の役割とも類似します。

◆国際試合と大学のスポーツ

一九一二年に、オリンピックの参加と国民体育の発達をめざして大日本体育協会が設立されました。国内のスポーツ選手権や国際競技大会に出場するアスリートは、高等教育機関でスポーツをしていたエリート学生でした。一九一二年ストックホルム・オリンピックの選手選考会では、九一名中九〇名が高等教育機関を中心とした学生でした。スポーツが、上流階級の身分的な制約を強くもつていたことや、高等教育機関に進学しなければスポーツ活動を続けて競力を向上させる環境がなかったからです。大日本体育協会の「競技者資格」は、車夫、郵便配達夫、牛乳配達夫、魚屋挽子ひきこなど職業上筋力トレーニングになるような職業従事者の参加を認めていませんでした。一般的に企業に所属するアスリートが、大学所属のアスリートを凌駕するのは戦後のことです。

◆運動部のコーチング・スタッフ

のちに名古屋大学に受けつがれる高等教育機関では、外国人教官や帝国大学のアスリートた

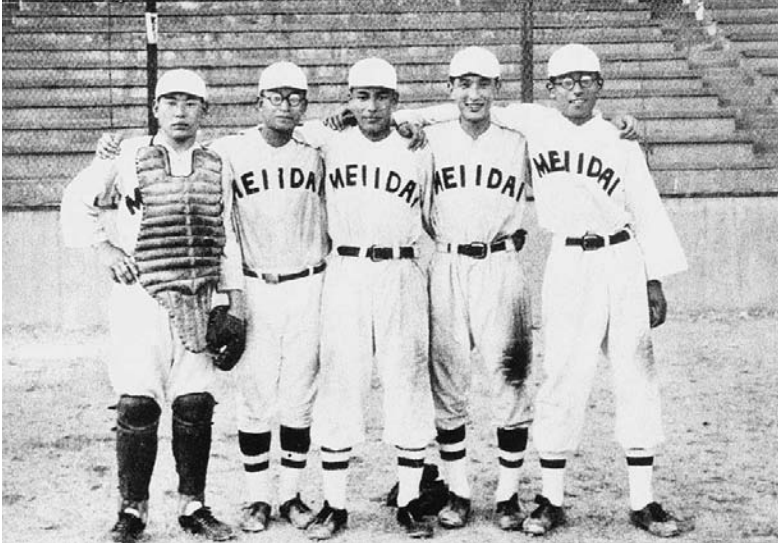
ちが指導をしていました。第八高等学校では、一九二三年に招聘しやうひんされた米国人パークヒルが陸上競技部、庭球部、籃球部らんきゅうぶを、またジョンソンが排球部を指導しました。またオリンピックメダリストの南部忠平や、第二回極東オリンピック大会でバスケットチームメンバーであった佐藤金一などの日本のトップアスリートが第八高等学校の指導をおこなった記録もあります。

名古屋高等商業学校には、一九二九年秋に講道館柔道の創始者、嘉納治五郎が講演のため来校し、講演後には柔道部を指導しています。また蹴球部しゅうきゅうぶには、大正一五年にのちに日本サッカー協会会長となる野津謙が指導にきています。

◆スポーツの普及に貢献した運動部

戦前は高等教育機関がスポーツの普及に貢献していました。第八高等学校の運動部は、近県の中等学校を集めた大会を主催し、地域のスポーツの普及もおこなっていました。四高戦（現金沢大学）に勝てない陸上競技部は、東海地方の中等学校大会を主催し、すぐれた中学生を集めていました。庭球部は近県中等学校庭球大会を、水泳部は一九三五年に中部日本中学校水上競技大会を開催しています。

名古屋高等商業学校では昭和初期に名古屋唯一の公認トラックであつた陸上競技場を外部団体の運動会にかしてしました。また剣道部、柔道部、野球部、庭球部、水泳部が、中等学校を



名古屋医科大学の野球部（江崎計三氏提供）

集めて競技会を開催し、スポーツの普及の一役を担っていました。

◆名古屋帝国大学と運動部

戦前の一九三九年に発足した名古屋帝国大学は、名古屋医科大学を引き継いだ医学部と理工学部（昭和一七年に理学部と工学部に分離）からなっていました。医学部は鶴舞キャンパスにあり、明治から続く運動部でスポーツ活動がおこなわれていました。理工学部は、一九四三年の東山キャンパスの開学まで仮校舎として愛知県立第一中学校（現旭丘高等学校）を使用していました。歴史の浅い名古屋帝国大学は、東京帝国大学や京都帝国大学のように戦前の大学スポーツをリードする存在ではありませんで

した。しかし戦後に名古屋大学に合流する第八高等学校、名古屋経済専門学校（名古屋高等商業学校の系譜）、岡崎高等師範学校では活発にスポーツがおこなわれていました。

◆医学部学友会の運動部

現在でも医学部運動部があるように、医学部はスポーツ・運動組織である学友会を組織していました。

一九〇〇年に医学部の前身の愛知県立医学学校で同窓会が設立されました。発会式は、市内東練兵場での秋季大運動会に先立っておこなわれました。同窓会は、運動部、雑誌部、図書部、会計部の四部制でした。運動部には、陸上運動部と水上運動部がありました。陸上運動部には柔剣部、野球部、庭球部、弓道部の四部があり、銃剣部は一九一四年に陸上運動部から分離しました。いっぽう水上運動部には、短艇部と水泳部の二部がありました。短艇部は、一九〇一年に市立名古屋商業学校短艇競漕に出場し、愛知県立第一中学校を破ったのが始まりです。

一九〇〇年に始められた陸上運動会では、ランニング、庭球、野球、柔剣道、綱引きなどの多くの運動競技がおこなわれていました。その後、各運動部が独立してランニング中心の陸上運動会になります。余興や各種売店、仮装行列や独特の競技（解剖競争、綱引競争、診断競争、内科競争、調剤競争などの趣味と実益を兼ねた競技）を見物しようと近県からも毎回数万

人もの観衆が集まっていました。娯楽の少ない当時では、エリートたちが繰り広げる一大スポーツ・運動イベントとして地域住民も巻き込んでいたようです。

一九〇九年、同窓会は愛知県立医学専門学校校友会と改称されました。一九二〇年の愛知医科大学創設にいたって旧校友会は愛知医科大学のそれに包含され、医学部校友会となりました。愛知医科大学時代には、山岳部、乗馬倶楽部、ホッケー部、射撃部、スキー・スケート部、漕艇部が創設されています。一九三一年に愛知医科大学は官立名古屋医科大学へ移管されますが、校友会は「名古屋医科大学鶴天学友会」として継承されています。名古屋医科大学時代には自動車部、帆走部が新たに加えられました。

◆第八高等学校の運動部

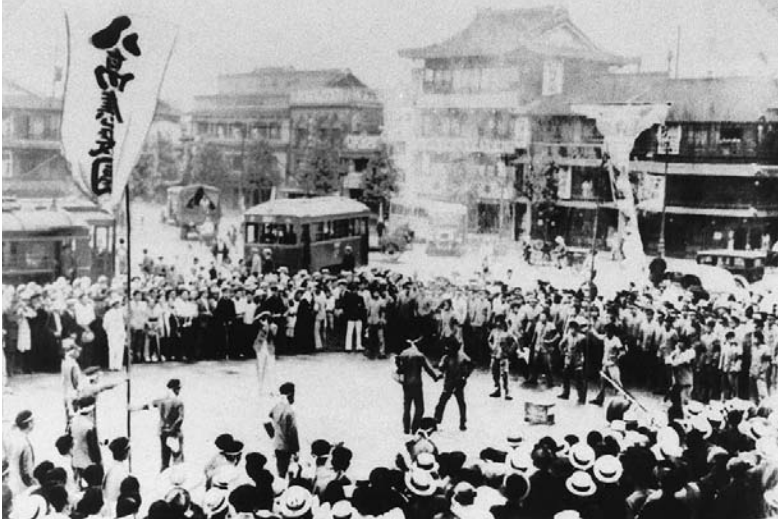
一九〇八年に開校した第八高等学校は、創立当初から校友会が設けられました。一九一八年の創立一〇周年記念祭では、運動会、相撲大会、野球大会などがおこなわれています。またそのころは学寮対抗、校内スポーツ大会がさかんにおこなわれました。大島義脩初代校長は、選手制度をとらず試合には有志を募って出場していました。選手制度が承認されたのは、運動を奨励する芝田徹心校長になった一九二二年のことです。野球の対四高戦（現金沢大学）は、芝田校長が四高出身ということもあり始まりました。それを機会に応援団も結成されました。

八高の運動部は輝かしい戦績をおさめています。八高には、野球部、陸上競技部、水泳部、漕艇部、柔道部、排球（バレーボール）部、藍球部（バスケットボール・関東と関西のバスケットボール界が統合するまでは籠球と藍球が使用された）、蹴球（サッカー）部、庭球部、弓道部、剣道部、相撲部、卓球部、応援部、体操クラブ、山岳部、自動車部（機甲班）がありました。

しかしスポーツのさかんな八高も戦時体制には勝てませんでした。一九四一年には校友会が改組されて第八高等学校報国団となり、運動部の活動も縮小もしくは停止になりました。一九四三年には運動競技会はすべて延期となり、対四高や対三高（現在の京都大学）のような一部の対抗戦がおこなわれるのみでした。一九四四年には球技はすべて廃止になりました。

◆八高の活躍

漕艇部は一九一〇年に創部されました。選手制度の導入にともなって、一九二三年に、対七高（現鹿児島大学）戦が始まります。この七高戦は一九二七年に雨で流れ、その後は対校レースから優勝レースに切り替わりました。また一九二八年から京都帝国大学主催の全国高等学校優勝大会が瀬田川で開催されるようになりました。八高は第一回、第二回大会と連覇しています。同大会は一九三〇年から、京都帝大と東京帝大の合同主催となり、固定席のボートは京都



対四高戦 名古屋駅前での両校応援団
 (左手が八高、右手が四高。中央で応援団が握手)
 (『写真集 旧制四高青春譜』第四高等学校同窓会(1986)所収)

帝大が瀬田川で運営し、滑席のボートは東京帝大が隅田川で運営することになりました。

八高は滑席のボートでおこなわれる全国高校エイト大会で、第一回大会から第三回大会まで三連覇しています。一九三三年からは東京帝国大学、早稲田大学、慶応大学に混じり日本の最高レベルであった一高(現東京大学)が参加することになります。八高は、一九三五年には一高を破り優勝をおさめています。「前畑がんばれ！」の一九三六年ベルリン・オリンピックには東大クルーが日本代表として出場していますが、そのなかの中川春好は八高漕艇部OBでした。

水泳部の歴史は、野間遊泳部時代、初

期競泳部時代、プール建設時代、黄金時代、伝承時代、戦時暗黒時代、戦後にわけられます。一九〇八年に学生が野間で水泳をしたのが野間海水浴場の起こりとされています。水泳部は日本泳法の神伝流が流儀でした。当時はプールがなかったため、野間海水浴場やため池で泳いでいました。

一九二四年、パリ・オリンピックが開催されました。そのころ東大に進学した先輩によってクロール泳法などが伝授され、水泳部では、泳法の変化がありました。一九二七年秋、八高教室に二五メートルプールが完成しました。その後、競技会成績も好調となり、全国高等学校水上競技大会では三連覇を飾っています。

排球部は、一九二三年に愛知一中出身の学生が輪になってパスを始めたのが最初です。当時、排球は一般に普及していませんでした。そこで小学校や中学校を相手に対戦し、Y・M・C・Aの大会や美津濃運動具店（現ミズノ）主催の大会に出場していました。しかしその実力は、第八回極東オリンピック大会東海地方排籃球予選に参加するほどのものでした。当時はバレーボールもバスケットボールもマイナーなスポーツであったため、二つの種目が同時に開催されています。一九二八年にインターハイが開始され排球部は、早くも第二回大会で優勝しています。

庭球部は、一九〇九年に結成されました。当時は軟式で京都帝大主催の大会に参加していま

す。一九一七年から一九二一年にかけて日本人がテニスの国際舞台で活躍したこともあって、一九二二年に日本庭球協会が設立されました。国際大会の影響で一九二四年からは京都帝大主催の大会でも硬式が採用されるようになりました。

◆名古屋高等商業学校の運動部

一九二一年開校の名古屋高等商業学校は、その年の一月に学友会が結成されました。最初に設立された部には、総務部や文芸部とともに剣道部、柔道部、弓道部、陸上競技部、野球部、庭球部、蹴球部がありました。当時は選手制度がなく、生徒はすべての部に所属していました。陸上競技部は、一九二一年秋に市内で駅伝大会を開催したことが記録されています。市民に学生の意気をしめしたイベントだったようです。一九二三年の第一回東海高専大会では八〇〇メートルリレーで優勝もしています。

野球部は徐々に実力をつけ、一九二九年にミシガン大学との国際試合も開催しています。翌年には、南満州鉄道や大連実業団と対戦するために中国大陸に遠征しています。さらに一九三一年には予選で法政大予科、一高に勝利して東京地方代表となり、甲子園での優勝大会では山口高商、立命館大予科を破り高専球界の全国制覇を達成しています。

水泳部は、一九二四年の秋の市内高専水上大会に優勝していますが、部としての体制が整っ

たのは翌年のことです。当時の水泳部にはプールがなく、覚王山や八事山の池で練習をしていました。中京地区に初めて七本松のプールが建設されたのは、東西の地区にくらべて遅い一九二七年のことでした。その後水泳部は七本松のプールを拠点として練習をおこない、三年後の第二回全国高商連盟大会で五種目で記録を更新して、総合得点で優勝しました。入賞者には、一九三二年のロサンゼルス・オリンピックの一〇〇メートル背泳で優勝、晩年には国際オリンピック委員会副会長として活躍する清川正二がいます。

相撲部は一九二四年春、陸上競技部から独立して正式に学友会の運動部として認められました。同年の土俵開きには横綱常の花、大関大の里、前頭鬼風が招待され、常の花が土俵入りをおこなっています。この年は関東大震災の直後のために大相撲が名古屋で開催されていたためでした。この年には東海大会で優勝するとともに、明治神宮大会では団体三位にも入賞しました。大阪の浜寺でおこなわれた大阪毎日主催の大会では個人優勝者も出ています。

藍球の始まりは一九二三年頃とされています。当時、体育のパークヒルの指導により寮生の間で盛んにおこなわれていました。藍球部は、一九二八年に学友会の部として設立されました。同年五月にY・M・C・A主催の東海選手権大会に出場し、八高に敗れたものの準優勝しています。一九三〇年には高等専門学校藍球連盟が成立し、第一回リーグ戦では浜松工や八高を抑えて優勝を果たしています。



名古屋高等専門学校陸上競技連盟第1回競技会優勝(1926年)(経済学研究科所蔵)

蹴球部は、一九二五年に東海蹴球連盟設立と同時に加盟しました。第一回リーグは八高が優勝し、名高商は二位でした。しかし一九二七年春のリーグ戦では八高を破り優勝しています。

ラグビー部の起源は一九二六年一〇月になります。八高で開催された名古屋ラグビー対大阪毎日の試合に刺激を受けて、名古屋ラグビーから与えられたボールで練習を始めたのがきっかけです。昭和五年には東海代表として花園全国大会に出場しています。

◆岡崎高等師範学校の運動部

一九四五年四月、岡崎高等師範学校は四番目の高等師範学校として設置されました。

しかし第二次大戦末期で校舎を空襲で全焼したのち、終戦を迎えています。戦災、豊川への移転、生活の困窮という激動のなかで自然発生的に教職員学生の文化向上、生活福祉を目的とする自治会、校友会、共済会が生まれてきました。一九四九年にこの三つの組織がまとまり、学生会が発足しました。運動部は旧校友会から引き継がれ、学生会のなかにありました。運動部は、校内のレクリエーションをはじめとして大阪大学との競技もおこなっていました。

野球クラブは、一九四六年になんとか道具をそろえ、翌年には四師リーグ戦（東京高等師範学校、広島高等師範学校、金沢高等師範学校）で優勝を果たしました。

排球クラブは、唯一配給のあった一個のボールで始めました。一九四七年には東海大学バレーボール連盟の試合に参加しています。

庭球クラブは一九四六年度に発足しています。翌年には四師リーグで優勝もしています。

蹴球クラブは、開校半年後には誕生していました。当時はラグビー部と分離されておらず、裸足のままボールに戯れるような状態でした。その後、東京文理大（現筑波大学）から教官が着任して指導をおこなったことが記されています。

卓球クラブは一九四七年に寮食堂の片隅の古びた卓球台を使って始めました。

籠球クラブは一九四八年に始まりました。四師対抗戦では優勝もしています。翌年に名古屋大学学部、分校、八高、名経専とともに合同し、名大籠球クラブが発足しました。

二 戦後から六〇年代の体育会

◆全名大への合流

一九四七（昭和二二）年、名古屋帝国大学は名古屋大学と名称をあらため、翌年に法経学部と文学部が設置されました。また一九四九年に医学部、工学部、理学部、法経学部、文学部、教育学部からなる新制名古屋大学が設置されました。それと同時に第八高等学校、名古屋経済専門学校、岡崎高等師範学校、名古屋大学附属医学専門部が新制名古屋大学に包括されました。これによってそれぞれの運動部は新制名古屋大学として合流することになり、公式大会においては旧制名古屋大、八高、経済専門学校、岡崎高師が全名大として出場することになりました。

名古屋大学は、名城地区、東山地区、鶴舞地区、瑞穂地区、高蔵地区、豊川地区、滝子地区、安城地区にキャンパスが分散していました。教養部学生は、一、二年生を滝子地区と豊川地区ですごし、三年生になるとそれぞれの学部のあるキャンパスで生活をしていました。名古屋大学は、東山キャンパスへの集結を計画し、一九五九年には経済学部と法学部が、一九六二年（昭和三七）年に文学部、一九六三年に教育学部、一九六四年に教養部と本部が東山キャンパ

スに移転しました。

◆名古屋大学体育会の結成

名古屋大学体育会は、個々に活動していた各運動部のとりまとめ役的連合体として一九五六年五月に結成されました。当初、体育会は、大学の公認団体ではありませんでした。しかし五年後の一九六一年に基盤の拡大や資金面の支援要請をめざし大学から公認を受けました。

名古屋大学体育会の目的は、「会員の体位の向上、スポーツマンシップによる人格の陶冶、及び会員相互の親睦を図ること」にあります。その目的を達成するために体育会は、「会員一般へのスポーツの普及に貢献する事業」、「学内運動競技会の開催」、「運動部活動及び対外試合」、「その他、本会の目的を達成するために必要と思われる事業」を実施しています。

また名古屋大学体育会は、『濃緑』という機関紙を発行しています。以下では、この『濃緑』をもとに現在までの体育会の歴史を紹介しましょう。

◆活躍する運動部

多くの運動部は、一九四九年に新制名古屋大学になると同時に創設されました。なかには、名古屋帝国大学以外の運動部の流れを引き継いだものもあります。硬式野球部は旧医科大学を主

表1 名古屋帝国大学・旧名古屋大学の運動部

現在の名称	母 体
漕 艇 部	愛知医学校に明治一八年に設立されたものを引き継ぐ
陸 上 競 技 部	第八高等学校、愛知医科大学に大正十三年に設立されたものを引き継ぐ
硬 式 庭 球 部	名古屋医科大学に昭和六年に設立されたものを引き継ぐ
ヨ ッ ト 部	名古屋医科大学に昭和八年に設立されたものを引き継ぐ
バスケットボール部	名古屋医科大学に昭和十年に設立されたものを引き継ぐ
ラ グ ビ ー 部	名古屋医科大学に昭和十年に設立されたものを引き継ぐ
サ ッ カ ー 部	昭和一四年設立
軟 式 庭 球 部	昭和一六年設立
バレーボール部	昭和二〇年設立
硬 式 野 球 部	昭和二三年設立
水 泳 部	第八高等学校から昭和二四年に引き継ぐ
馬 術 部	医科大学から昭和二四年に引き継ぐ
山 岳 部	医科大学から昭和二四年に引き継ぐ

体に創立され、愛知大学野球リーグの主導的役割を担っていました。そしてリーグ開幕と同時に優勝をはたし、東京六大学や関西六大学のチームにもひけをとらない実力を持つていました。

サッカー部は、一九六〇（昭和三五）年の朝日招待サッカーで、当時大学選手権を制した八百樫選手らの早稲田大学サッカー部に二対〇の勝利をおさめています。陸上競技部には、一九六五年度の全日本陸上十種競技七位の成績をおさめた学生がいました。硬式テニス部は一九六四年まで一部リーグで優勝し、全国大学王座決定戦では連続第三位の実力を持っていました。その後も二〇年間一部リーグ二位の成績を維持しています。ヨット部は一九六六年、イン

カレで準優勝を果たすほどの実力を持っていました。卓球部は二部の東海リーグ一部リーグ復帰を目標に活動し、バレーボール部は東海学連の一部リーグに所属しています。柔道部は学生柔道東海地区でベスト四に入り、バスケットボール部は東海リーグ二位の成績でした。

◆ 「運動部の体育会」から「会員みんなの体育会」

一九六〇年代後半、体育会の性質は「運動部の体育会」から「会員みんなの体育会」へと変化してきました。背景には、吹き荒れる大学紛争や学生運動に参加する学生とスポーツに熱を入れる一部の運動部員との関係の乖離かひりがありました。また当時の体育会委員長も、多くの会員のいる体育会が、一部の運動部員だけで構成される委員会によつて物事が決められていくことに問題点を感じていました。

そこで体育会では、一般会員の参加する各種スポーツ大会、講習会、運動会、駅伝などを開催して、運動部に占有されているように誤解されているスポーツを万人に解放し、一般会員がスポーツに親しみ、身近にスポーツの存在を感じる事ができるように活動をめざしました。しかし一般会員への連絡組織がないことや、一般会員には体育会活動への発言の場がないことから、十分な成果を上げるにはいたらなかったようです。

◆一般会員へのスポーツ普及活動

体育会は、会員だけをみれば名大生の九割以上からなる組織でした。しかし体育会に入会しても運動部に所属しない学生が多いのが実情でした。そこで体育会は、これらの会員へのスポーツ・運動の普及策としてさまざまなとり組みをおこなってきました。

一九六〇年代後半には、クラス委員制度を数年計画で確立し、将来は教職員をも含めた全学のスポーツ組織を確立しようとする方向が模索されました。しかしクラス連絡委員制度は立ち消えとなり、一九六九年には新にクラス体育委員が発足しました。しかし大学紛争による本部封鎖などの学内の事態が学生の関心をスポーツから遠ざけることとなり、このクラス体育委員会も自然崩壊しました。

◆大学紛争と体育会

一九六八年の東大紛争以降、名古屋大学も紛争が吹き荒れます。名古屋大学体育会は、スポーツの組織のなかに政治思想をもちこみ行動することはやがて対立・内部崩壊を招くことになるとして、政治運動とは一線を画していました。しかし体育会には、それまであまり関与しなかったカリキュラム問題や大学運営への学生参加の問題などに対して、体育会の立場で取り組み、課外活動のあり方や大学内での位置づけなどを追求してゆきたいという考えもありました。

一九六八年の『濃緑』は、体育会と政治的活動にもふれています。そのころの体育会は、文化サークル連盟、名大祭本部実行委員会、自治会とともに学園政策委員会を構成していました。一九六八年度には部室設立運動を実施し、武道館関係クラブ、応援団の代表が武道館設立準備委員会を組織し、二階建ての武道館建設を要求しました。また蓼科高原気候医学研究所跡に建設される宿泊施設に対する要望事項をとりまとめる「蓼科高原山の家委員会」も組織しています。さらに課外体育検討準備委員会をつくり、学生部長と学部代表教官からなる体育委員会に常時三名の学生代表を参加させていました。

三七〇年代の体育会

◆体育会と学生スポーツの変化

一九七二年山岳部は、現役学生四名を含む七名の西ネパール遠征隊を派遣しました。ジェイ・ボウラニ峰（六九四〇M）の頂上には到達できなかったものの、現地名の確認、地図の訂正などの成果をおさめています。しかし七〇年代になると中部地区の私立大学運動部の実力



総合体育館とプール（1970年代）（附属図書館医学部分館所蔵）

が向上し、伝統的に強豪であった名古屋大学をはじめ
国立大学の運動部の凋落ちようらくもはじまっています。このこ
ろから体育会運動部に入学する学生が減少するととも
に、リーグ戦などにおいて二部リーグに落ちるクラブ
が増加してきました。一九六〇年代後半には一五〇〇
名以上いた運動部員が、一九七一年には一〇〇〇名の
大台を割っています。当時総入学人数が一五〇〇人台
で推移していたにもかかわらず、部員数は一九七二年
には、八八三人と毎年減少しています。このような運
動部衰退の理由には、「多様化・個性化の時代」、「エ
ンジョイ」という言葉に象徴されるように、①クラブ
活動の魅力の相対的減退、②同好会の増加、③脱組織
志向型の学生の増加にあると考えられます。

◆スポーツサークルの萌芽

いっぽうで体育会が主催する各種スポーツ大会への

参加者は多く、この頃から体育会的スポーツ形態よりも娯楽的なスポーツ形態を求める学生が増えてきたことを示しています。『濃緑』には、早稲田大学の事例がとりあげられ、名古屋大学にも体育会の運動部以外に同種目の同好会（スポーツ系サークル）が誕生するだろうと書かれています。

体育会では、同好会の結成を日常的にスポーツ活動をおこなう学生の増加であると前向きに理解し、施設・技術・金銭面で援助を与えていくべきであると考えていました。しかし一九七一年頃から、体育会会員で運動部に所属しない学生を「一般学生」として表現するようになり、「会員」を「運動部員」に限定する意識、つまり同好会に所属する学生と運動部所属の学生とを区別する意識も芽生えつつありました。

◆体育会財政強化とスポーツマネジメント

一九七〇年代の体育会は、財政が安定していたわけではありません。体育会では財政強化策も考えていました。たとえば、会費の値上げをはじめ、大学側による入会金の完全徴収という方法が提案されています。またプロのアーティストの興行を実施し、興行収入による財政強化をはかろうとする案もありました。そのほか企業スポンサーを募集する後援会組織の設立も考えられていました。これらの案は現代のスポーツマネジメント顔負けの手法です。

実際、一九七三年度には営利事業として、愛知文化講堂で本田路津子と森田公一&トップギヤランのコンサートを開催しています。同コンサートには一〇〇〇人あまりの入場者が集まり、一〇万円程度の利益を上げています。しかしチケットを体育会が販売することは自己負担が多く、その割に利益が少なかったようです。現在のようにレジャー志向が高くなかった当時において音楽会をプロデュースするような文化事業には多くの苦労があったと思われる。

◆体育会と社会の交流

七〇年代のワンダーフォーゲル部では、参加者を広く一般から募る「オープンワンダリング」を実施していました。これは大学の地域開放という点で画期的な企画です。学外者も含め一〇〇人近くの参加者が、鈴鹿の宇賀溪でのキャンプを楽しんでいます。またヨット講習会も学外からの参加を受けつけていました。今でも名大祭は本学学生以外に公開されていますが、名大祭期間中に実施されたマラソン大会には、学生以外の参加もあつたようです。

◆大学における課外体育活動の位置づけ

体育会のなかには、部員の会費だけではまかなえない高価な備品を必要とする運動部があります。たとえば馬術部がそれにあたります。一九七一年には、馬術部の馬の飼料代助成の問題

とかかわって、馬を備品とするか否かの議論がありました。このとき本部体育委員会では、大
学側がクラブ活動への援助する根拠となる「課外体育活動」の明確な位置づけがなかったため、
「課外体育活動」の意義について検討することとなりました。当時の大学当局は、文部省が課
外体育活動の意義を認め、予算措置をとることがない限り、クラブへの公的な助成はできない
としていました。

◆体育会での事件・事故

一九七一年に、馬術部の厩舎と馬七頭を焼失する事故が起きてしまいました。また航空部の
部員が合宿参加の移動中交通事故死する事故もありました。そして事故死した学生の両親が損
害賠償を請求する訴訟を国に対しておこないました。この事故では学生の課外活動に対する大
学の責任が裁判で争われました。また一年後の同じ日である一月二五日に体育会のクラブハ
ウスが焼失する事故もおこりました。こうしたこともあつて、一月二五日は体育会にとつて
不吉な日として『濃緑』に紹介されています。

◆新しい運動部

レジャーも多様化してきた一九七〇年代にはいくつかの新しい運動部が生まれました。その

表2 体育会結成以前に設立した運動部

卓球部	昭和24年設立
準硬式野球部	昭和25年設立
剣道部	昭和25年設立
柔道部	昭和26年設立
体操部	昭和26年設立
女子バレーボール部	昭和27年設立
ハンドボール部	昭和28年設立
アイスホッケー部	昭和29年設立
バドミントン部	昭和30年設立
航空部	昭和30年設立

表3 体育会結成以後に設立した運動部

日本拳法部	昭和32年設立
ライフル射撃部	昭和32年設立
スキー部	昭和32年設立
弓道部	昭和33年設立
自動車部	昭和34年設立
ワンダーフォーゲル部	昭和34年設立
ゴルフ部	昭和35年設立
空手道部	昭和36年設立
応援団	昭和37年設立
舞踏研究会	昭和37年設立
少林寺拳法部	昭和43年設立
アメリカンフットボール部	昭和50年設立
女子バスケットボール部	昭和51年設立
合気道部	昭和54年設立
ソフトボール部	昭和57年設立
オリエンテーリング部	昭和59年設立
フィギュアスケート部	昭和63年設立
ラクロス部	平成6年設立
トライアスロン部	平成6年設立
ボクシング部	平成6年設立
アーチェリー部	平成11年設立
軟式野球部	平成6年準加盟

ころ新しく登場してきた運動部にはボーリング同好会、舞踏研究会、名大ユースホステル同好会などがあります。一九七五年四月に結成されたアメリカンフットボール同好会は、創部後三年目にはBブロック（二部リーグ）優勝、そして六年目には東海リーグAブロック優勝を飾っています。

またこの頃には女性のスポーツへの参加も進み、応援団バトン部が結成されました。少林寺拳法部には女子部員第一号が一九七八年度に登場しています。

四 八〇年代以降の体育会

◆ 競技成績の低迷

田中康夫氏の『なんとなくクリスタル』に象徴される一九八〇年代、体育会運動部の部員数の減少と他大学の競技力強化によって、名古屋大学運動部は競技成績の低迷が続きました。いつぼうキャンパスではスポーツ系のサークル活動がさかんになっていきました。八〇年代に活躍した運動部としては、七〇年代後半からくり返しインカレに出場していたバスケットボール部や一九八三年にインカレに出場し、二回戦に進出したソフトボール部があります。

◆ 『濃緑』も時代とともに

従来、『濃緑』は、運動部員の一部と新生向けに配布されてきました。しかしそれでは学年を重ねた一般会員に情報が伝わりませんでした。そこで一九七一年、はじめて一般会員向けの『濃緑』が発行されました。

デザインや装丁、そして執筆のスタイルは、時代とともに変化しています。一九七五年の

『濃緑』からは、執筆規定のあったクラブ紹介のスタイルが自由になり、運動部の生活が生き生きと紹介されるようになりました。いつぼう顧問や新年度役員の写真、部員数、練習時間などの掲載がなくなり、運動部の概要がわかりづらくなった気もします。

また勧誘の状況などが変化したかどうかはわかりませんが、入学手続きの際に歩く通称「細道」が、一九七九年までの「夢の細道」から、一九八〇年には「地獄の細道」と記述されるようになっていきます。

カラー写真で運動部が紹介されるようになったのは、一九八八年度からです。いわゆるバブル景気の時代ですから、『濃緑』の広告収入はこの頃から急激に増加しています。やはり体育会の経営も世相と反映しているようです。

一九九〇年度の『濃緑』では、はじめて女子学生の運動部専用紹介のコーナーが設けられました。ピンク色のページで女子学生の運動部活動が紹介され、同じ運動部でも男子と女子とは異なる紹介があるということが感じられます。また一九八九年には女性の常任委員も誕生しています。

◆近年の『濃緑』とインターネット

近年では『濃緑』も大きく変貌し、運動部員内部にうけを狙った匿名部員の雑誌風の読み物

になってきました。一九九八年版からは年間二〇〇〇万円以上の金額の動く体育会の決算書が掲載されなくなっています。これは、一般会員への説明責任を果たすうえで問題があるように感じられます。また二〇〇〇年版『濃緑』からは、会務を執行する常任委員会の説明も掲載されなくなっています。こうした点からみると、『濃緑』という媒体の機能を見直す時期が来ているのかもしれない。

最近では、体育会のホームページが開設させるなどのITの活用が進行しています。各運動部でもホームページを作成し、積極的に情報公開をおこなっているようです。

◆体育会から見た名大生気質

一九八五年、体育会も三〇年周年をむかえました。第三〇代の赤尾幸俊体育会委員長は、名古屋大学体育会の当時の風潮を『濃緑』に寄せています。

「名大祭と言つて騒いでいることもあるけれど、それにしたところで、盛り上がりは今一つではないだろうか。そして三年前の七大戦。名大が主管でありながら東大に優勝をさらわれ、二位に甘んじていたあの名大。それらの風潮を如実に語るのは名阪戦においてせり合いの末みじめにも負けていることである。二年前の名阪戦の逆転優勝の可能性というのは、名大が阪大に劣らないということの意味しているのだ。しかし負けた。なぜなのだろうか。原因はいろいろ

表4 国立七大学体育会のホームページアドレス (2001年3月現在)

北海道大学体育会	http://www.hokudai.ac.jp/bureau/gakumu/gakusei/taiiku.htm
東北大学学友会体育部	http://www.tohoku.ac.jp/student/index-j.html
東京大学運動会	http://www.undou-kai.com/
名古屋大学体育会	http://www2.jimu.nagoya-u.ac.jp/circle/sonota/taiikukai/
京都大学体育会	http://www.kusu.kyoto-u.ac.jp/
大阪大学体育会	http://www.river.sannet.ne.jp/ousu/index.html
九州大学体育総務委員会	http://isweb31.infoseek.co.jp/school/taiikuso/



体育会機関誌『濃録』

考えられるが、名大は一点二点を争う接戦になるとなぜか負けているということである。

ところで今一つ気になる風潮というものがある。それは「挑戦してやろう」ということが日常茶飯事に起らないことである。名大は歴史としては新しく、それゆえ学問的にはかなり革新的に（イデオロギーとしてはではなく）活動している。しかし学生の側には、何かそんな空気は薄い」。この文章からは名大生の学生気質が読み取れます。

◆体育会の組織改革

一九八〇年代後半になると、体育

会の組織改革がはじまりました。それまで体育会では、運動部から選出される委員によって構成される委員会が最高議決機関でした。そして委員会では、正会員のなかから選出された常任委員が会務を執行していました。一九八八年に体育会規約が改定され、運動部を六グループにわけ、そのグループごとに一名の常任委員を必ず選出することになりました。また委員会の承認を得れば、一般正会員が常任委員になることができることも明記されました。こうした組織改革によって、より多くの学生が体育会の会務にたずさわることができるようになりました。

◆体育会会長賞と運動部の活躍

一九八九年、名古屋大学体育会会長賞が設けられました。優秀な個人、団体およびその指導者の榮譽をたたえ、その功績を広く顕彰することが目的でした。会長賞には特別賞と一般賞があり、初年度は、中部日本学生拳法大会個人の部準優勝の増崎貴（日本拳法部）、天山山脈雪蓮峰（中国標高六、六二七m）の初登頂に成功した岩淵英人（山岳部）、第四四回国民体育大会に出場した大月岳彦（水泳部）・丹下靖英（陸上競技部）、愛知県下学生弓道大会個人の部優勝の山田修（弓道部）、団体には少林寺拳法部が選ばれました。表彰式のなかで早川幸男学長は、「今日の表彰式では、表彰に五分足らずしかかからなかったが、来年には五分から十分、再来年には十分から十五分へと表彰の時間が延びていき、あまりに多すぎる表彰対象者のためにう

れしい悲鳴をあげられるようになることを期待します」と祝辞を述べています。特別賞は平成六年度に第四九回国民体育大会ヨット競技で優勝した竹本さやか（一般会員）が受賞しています。

◆名古屋大学の変化と大学スポーツシステムの見直し

二〇〇〇年度現在、名古屋大学では大学院の重点化が完了しました。その結果、入学者における学部学生と大学院生の構成はほぼ同数となっています。学内構成員は、二〇〇〇年現在、学部等学生が約一万一〇〇〇人、大学院学生が約五七〇〇人、短期大学部学生が二〇〇人、教職員が約三五〇〇人、留学生が約一〇〇〇人となっています。

こうした名古屋大学の変化にともなって、体育会運動部に所属しない留学生、大学院生、社会人、そして教職員が増加しています。体育会運動部の目的は、「会員の体位の向上、スポーツマンシップによる人格の陶冶、及び会員相互の親睦」です。そのため、体育会へ大学院学生、教職員、留学生を入会させるマネジメントが求められます。そのためには体育会のスポーツ事業に多様性を持たせる必要があります。

たとえばスポーツ大会など運動部に入部しない会員に対するスポーツサービスの充実が必要になります。学部学生に限定された従来の競技中心の単一型から、多様な参加形態を選択でき

る運動部への変貌がもたられているのではないでしょう。一部の小学校や中学校の部活動では、少子化の影響で学校の壁をこえて統合するなどのスポーツ改革の動きがあります。また地域のスポーツクラブを育成する動きもあります。体育会運動部でも、舞踏研究会、オリエンテーリング部などはいち早く外部の大学と連携しながら運営がおこなわれています。今後いつそう体育会運動部が、全学的に認められるようマネジメントを見直す必要があるのではないのでしょうか。

◆体育会スポーツと公開講座

名古屋大学は、名古屋大学通則に「社会人の教養を高め、地域社会の教育文化の向上に資するため、本学に公開講座を開設することができる」（第六七条）としています。一般に国立大学では、スポーツ・レクリエーション関連の公開講座が開講されています。講座の内容はテニス、ゴルフ、スキー、水泳が多く見られ、とくに体育・スポーツ科学を専門とした鹿屋体育大学や体育専門学群のある筑波大学では多様な講座が用意されています。対象は一般市民、専門家、青少年で、受講者の熟練レベルを問う講座もみられます。このような公開講座は、ハード（施設）とソフト（指導者）、そして両者のマネジメントが必要になります。今後こうした面においても、体育会の果たす役割があるのではないのでしょうか。



山田杯争奪駅伝大会

◆体育会と大学スポーツ施設の開放

スポーツ施設の開放は、地域社会のスポーツ活動に貢献するひとつの方法です。国立大学のスポーツ施設を学外の人が利用することは、「国の庁舎等の使用又は収益を許可する場合の取扱の基準について」（会計参事官通知国会第六号）で決められています。スポーツ活動では「庁舎等の一部（グランド等）を地方公共団体等の主催する野球大会等に使用させる場合」に該当します。この場合、使用期間が一時的であり、かつ使用目的が営利を目的としないという条件があります。使用料金は、使用料算定基準に基づいて算定されたものに消費税が加えられます。また電気、水道、電話、ガス料なども利用者が支払う必要があります。

現在、名古屋大学では施設開放の積極的なPR活動はなされていません。しかし体育会が地域社会へのスポーツサービスを提供すれば、学生、職員、市民との交流が深まるとともに学生の貴重な社会体験になるのではないのでしょうか。

五 学内のイベント

◆体育会の事業

米国の大学には、正課体育であるフィジカル・エデュケーションのほかにレクリエーション・スポーツ、インタラミューラル・スポーツ、エクストラミューラル（またはインターカレッジイト）・スポーツの三つの種類があります。レクリエーション・スポーツは、健康維持やレジャーのために学生や教職員、あるいは地域の人が参加することもあります。インタラミューラル・スポーツは、学内対抗スポーツ大会のことです。そしてエクストラミューラル・スポーツは大学対抗戦としてメディアにも注目されています。名古屋大学でも体育実技、サークルや同好会およびスポーツ事業、体育会が主催する各種スポーツ大会、体育会運動部の

対外試合があります。ここではまず、主として学内のスポーツイベントを紹介しておきましょう。

体育会は、レクリエーション・スポーツや学内対抗スポーツ大会イントラミューラル・スポーツにも力をいれています。一九六〇年代は、四月下旬に軟式野球・卓球・バドミントンなどの比較的ポピュラーな種目の春季学内大会がおこなわれました。またスポーツ講習会として、ライフル射撃、護身術、馬術、スケートなどが開催されました。さらに名大祭では体育祭が大規模におこなわれていました。これらは二〇世紀初期のオリンピックが万国博覧会のアトラクションとしておこなわれていたことも通じます。夏になると水泳大会やヨット講習会が開催されました。秋には秋季学内大会、耐久徒歩レース（犬山―名古屋大学間約四〇キロ）、駅伝大会、ボート、バスケットボール講習会、オープンワンデルング、ライフル、馬術講習会など盛りだくさんの行事がありました。冬になると須賀杯争奪駅伝、スキー講習会が開催されました。これらの行事は現在にもうけつがれています。

◆リーダーズ・アセンブリーとフレッシュマンズ・アセンブリー

一九六〇（昭和三五）年に始められたリーダーズ・アセンブリーは、各運動部の主将や主務などの幹部部員と学生部（現学務部）の職員、体育会常任委員が運動部の問題点の克服やマネ

ジメントについて研究する合宿です。いつぼう一九七五年から開催されたフレッシュユマーズ・アセンブリーは、体育会と各運動部の新入生、学務部職員が参加し、体育会の組織や事業への理解と、お互いの交流を図る合宿です。

◆須賀杯争奪駅伝競走

一九六四年に開始された須賀杯駅伝は、名古屋大学学生部長から豊田高等専門学校の校長になった須賀太郎が創始した大会です。豊田高専から名古屋大学までのおよそ二五キロは一般道を走るため、警察などへの事前の相談と許可を受けています。また選手や途中に立つ多くの整備員を移送するバスや看護車の手配まで、準備と当日のたいへんなマネジメントを体育会がこなしています。

◆山田杯争奪駅伝大会

山田杯争奪駅伝大会は、名大祭の期間中に一チーム六人で学内をリレーするミニ駅伝です。お祭り気分も手伝って派手なウエアでうけをねらった参加チームもあり、名大祭のスポーツ部門として体育会が主催しています。



七大戦総合優勝をかざる（第35回大会）

◆池谷杯学内レガッタ

レガッタは、定期的に開催されるボートレースです。ボート部部长であった池谷和夫の名前を冠している池谷杯学内レガッタは一九六九年に始められました。体育会が主催し、参加者をボート部艇庫の近くの庄内川に集めて開催されています。

◆ヨット講習会

体育会主催のヨット講習会は、真夏の常滑市鬼崎ヨットハーバーで開催されます。ヨット部員がインストラクターとして講習を実施しています。名古屋大学以外の学生や一般市民も参加できるため、夏のイベントにもなっています。

六 学外に羽ばたく体育会

◆名阪戦

名阪戦は、戦前から大阪大学との間で、各運動部が独自に開催していた対抗戦を戦後になって統合した総合的な対抗戦です。名阪戦の理想は、運動部だけの交流ではない全学的レベルでの交流親睦にあります。両校の運動部が交流を深めるために、試合はもとよりレセプションを用意しています。また一九七〇（昭和四五）年の二四回大会では、大学内の各種スポーツ大会で優勝した一般学生チーム同士の対戦という画期的な企画も用意されました。このとき名阪戦ボーリング大会では、学内大会の上位五人が名古屋大学代表として参加しています。お互いに旧帝国大学であり、同程度の規模ですが、名古屋大学体育会はこの名阪戦を多少苦手にしているようです。戦績は表五のようになっています。現在では毎年六月に開催されています。開催にはお互いの大学体育会、学生部が協力しています。体育会は、大会に対する資金援助、会場や宿舍の確保、大会の広報をはじめ、大会運営全般をマネジメントしています。

◆国立七大学総合体育大会

七大戰は、もともと帝国大学の流れを汲む国立七大学（北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）の間で各運動部が独自に開催していた定期戦を取りまとめた大会です。一九六一年頃は、剣道部や柔道部など伝統のある部で定期戦がおこなわれていました。しかし、時期や開催場所は一定せず、一般の関心も薄く消滅しそうな状況にありました。発案者は、一九六一年の阿竹宗彦・北海道大学体育会委員長でした。大会の目的は、クラブごとにかかる運営資金の縮小、総合化による士気向上、同レベル・同条件の大学が集まることによつて、競争意識、ひいては、全体のレベルを高めることにありました。

当初、阿竹さんの案は賛同を得られませんでした。とくに東京大学と京都大学は従来から競技レベルが高く、試合相手も不足しなかつたため、開催に反対の意向を示していました。しかし阿竹さんの熱心な説得によつて、賛同する大学も増えて第一回大会が北海道大学主管で実施されました。

その後大会は、肥大化によつて会場や宿舍の確保が困難になるという問題が発生しています。資金面でも一〇〇万円規模から、一九八〇年代後半には一〇〇〇万円規模と膨大なものとなり課題を残しています。この七大戰の開催は、七大学の持ちまわりで開催されています。

一般に、大会では開催大学が地の利を生かして総合優勝する傾向にあります。が、名古屋大学

体育会の成績は第二八回に総合優勝するまで一度も優勝がありませんでした。名古屋大学以外
はそれまでに総合優勝を経験しており、総合優勝の経験のない唯一の大学でした。表六に示す
ように地元開催となった第二八回大会でついに優勝を果たし、それ以降は上位を維持していま
す。また第三五回に二度目の総合優勝を果たしています。

ところでオリンピックをはじめとしたスポーツイベントでは必ずマスコットが作られます。
七大战でも北海道大学主管の第二二回大会以降、マスコットが作られています。一九九六年度
の『濃緑』には歴代のマスコットが紹介されています。

◆東海国立体育大会

この大会は、一九五二年に名古屋大学が主管して始められました。第六回大会までは東海地
区の私立大学や公立大学も参加していました。その後は六大学（名大、名工大、愛教大、岐阜
大、三重大、静岡大）の持ちまわりになりました。しかし名古屋大学以外の国立大学には体育
会組織がなく、大学学生部職員に多くの支援をうけて開催されているのが現状でした。一九七
五年度からは浜松医科大学、一九八〇年度からは豊橋技術大学も参加しています。

表5 名阪戦の戦績

種目	勝ち	負け	引き分け
陸上競技	12	30	
水泳	24	29	
硬式野球	27	10	
硬式庭球	7	37	1
バレーボール	8	29	
ラグビー	26	26	1
サッカー	21	22	8
バスケットボール	25	28	
ボート	27	23	
ソフトテニス	25	18	1
ヨット	26	23	2
卓球	22	24	
準硬式野球	23	18	1
柔道	22	18	5
ハンドボール	14	13	1
バドミントン	13	28	
剣道	21	15	1
ライフル射撃	28	8	
空手道	7	25	
弓道	15	21	
体操	5	23	
自動車競技	11	19	
航空	8	13	2
少林寺拳法	9	17	
アイスホッケー	15	11	2
スキー	11	14	1
アメリカンフットボール	6	14	1
ゴルフ	6	5	
ソフトボール	4	10	
フィギュアスケート	0	1	
男子優勝回数	16	33	4
バレーボール	11	21	
卓球	14	27	
ソフトテニス	14	22	
バドミントン	13	19	
硬式庭球	13	17	1
バスケットボール	11	12	
剣道	7	4	1
弓道	6	6	
フィギュアスケート	0	1	
陸上競技	2	0	
体操	2	1	
女子優勝回数	11	32	5
総合優勝回数	12	20	2

一九九〇年代以降、名古屋大学は「生涯学習社会の構築」に込められる役割を求められています。一九九六（平成五）年の生涯学習審議会答申は、大学をはじめとする「高等教育機関は高度で体系的かつ継続的な学習機会の提供者として、生涯学習社会の中で重要な役割を果たす

おわりに—これからの名古屋大学体育会

表6 国立七大学総合体育大会の戦績

	主管大学	開催年	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
第1回大会	北大	1962年	東大	九大	北大	東北大	京大	名大	阪大
第2回大会	九大	1963年	東大	九大	阪大	京大	東北大	名大	北大
第3回大会	京大	1964年	東大	京大	阪大	九大	名大	北大	東北大
第4回大会	阪大	1965年	京大	阪大	東大	名大	北大	東北大	九大
第5回大会	東大	1966年	東大	京大	名大	北大	阪大	九大	東北大
第6回大会	東北大	1967年	東北大	東大	京大	名大	北大	阪大	九大
第7回大会	名大	1968年	京大	名大	阪大	東北大	北大	東大	九大
第8回大会	北大	1969年	北大	阪大	東大	東北大	京大	名大	九大
第9回大会	九大	1970年	京大	九大	阪大	東大	東北大	北大	名大
第10回大会	阪大	1971年	阪大	東北大	名大	京大	九大	東大	北大
第11回大会	京大	1972年	京大	東北大	名大	阪大	東大	北大	北大
第12回大会	東北大	1973年	東北大	東大	京大	阪大	北大	九大	名大
第13回大会	東大	1974年	東大	阪大	京大	東北大	北大	九大	名大
第14回大会	名大	1975年	京大	東大	阪大	名大	北大	東北大	九大
第15回大会	北大	1976年	北大	京大	九大	東大	東北大	名大	阪大
第16回大会	阪大	1977年	阪大	九大	京大	東大	名大	東北大	北大
第17回大会	九大	1978年	九大	名大	阪大	京大3	東北大	東大	北大
第18回大会	京大	1979年	京大	阪大	東北大	名大	阪大	九大	北大
第19回大会	東北大	1980年	東北大	京大	北大	九大	阪大	東大	名大
第20回大会	東大	1981年	東大	東北大	京大	九大	北大	阪大	名大
第21回大会	名大	1982年	東大	名大	阪大	京大	東北大	九大	北大
第22回大会	北大	1983年	東大	阪大	北大	九大	東北大	京大	名大
第23回大会	九大	1984年	九大	阪大	東大	京大	東北大	名大	北大
第24回大会	阪大	1985年	阪大	東大	九大	京大	名大	北大	東北大
第25回大会	京大	1986年	京大	東大	阪大	北大	九大	東北大	名大
第26回大会	東北大	1987年	東北大	東大	京大	北大	阪大	北大	九大
第27回大会	東大	1988年	東大	京大	名大	北大	阪大	東北大	九大
第28回大会	名大	1989年	名大	東大	阪大	京大	九大	北大	東北大
第29回大会	北大	1990年	北大	東大	京大	名大	東北大	阪大	九大
第30回大会	九大	1991年	東北大	九大	名大	阪大	京大	北大	東大
第31回大会	阪大	1992年	阪大	名大	京大2	北大	東大	東北大	北大
第32回大会	京大	1993年	京大	名大	東大	阪大	九大	東北大	北大
第33回大会	東北大	1994年	東北大	名大	阪大	北大3	東大	京大	九大
第34回大会	東大	1995年	東北大	東大	北大	京大3	名大	阪大	九大
第35回大会	名大	1996年	名大	京大	阪大	東北大	東大	九大	北大
第36回大会	北大	1997年	京大	名大	北大2	東大	東北大	阪大	九大
第37回大会	九大	1998年	九大	京大	名大	東北大	北大	東大	阪大
第38回大会	阪大	1999年	京大	東北大	阪大	名大	九大	北大	東大
第39回大会	北大	2000年	京大	名大	北大	阪大	東北大	東大	九大

※同点の場合は大学名の後に順位をいれた。

ことが期待されている」と述べています。また文部省（現在、文部科学省）は、一九九八年に「国立大学等施設の整備充実に向けて、未来を拓くキャンパスの創造」と題した報告書を発表しています。そのなかでは「国立学校施設整備計画指針」における三本の柱のひとつに広く社会に開かれたキャンパスの整備があげられています。ここでは国立大学などのスポーツ・運動施設が地域の人々が利用しやすいように配慮するとともに、公共施設などとの連携、相互の有効活用を図る必要について述べられています。

しかし財政改革を迫られる昨今、スポーツ・運動施設の大幅な改修や増設を見込むことは不可能に近いと思われる。そこで利用時間の延長による対応や、施設の有効活用を目的とした利用システムの再構築が必要ではないでしょうか。

では名古屋大学体育会は、生涯学習社会の構築のために何ができるでしょうか。体育会は、年齢や性別に関係なく学内構成員のさまざまなニーズに対応する組織として生まれ変わることが望ましいのではないのでしょうか。

しかし学生自治団体としての体育会は、学生のボランティアによって支えられています。そのためマネジメント業務にも限界があります。したがって学内はもとより自治体や他大学、企業などの外部組織と連携を模索する必要があるのではないのでしょうか。

現状のスポーツ・運動施設では、アメリカの大学のように、一般学生や教職員あるいは学外

者が、体育会運動部の練習の制約を受けずにスポーツ施設を使用することは夢物語です。名古屋大学ではキャンパスプランを作成中ですが、体育会が先進諸国の大学スポーツ事情などを紹介するとともに、自身の役割や大学のスポーツ・運動施設の位置づけについてもつとアピールしていくことも大事だと思われまます。

最後に最近の名古屋大学体育会で活動している学生のみなさんに読んで欲しい記事があります。一九七一年の『濃緑』にある植田和男体育会委員長の寄せた記事です。

「体育会事業局では、名大全学にスポーツを普及すべく、関係クラブの協力のもとに、毎年種々な行事をおこなっている。しかしながら参加者が少なく、その意図が裏切られることが少なくない。これには主催者の側と、学友の側に大別して二つの原因がある。まず前者であるが、これは名大スポーツの先頭に立つ運動部を中心とする、我々の努力の問題である。第一に、学友のその時々におけるスポーツへの欲求を的確に握む（ママ）ことである。これは常に名大全学のスポーツの現実を把握することを要求する。第二に、その把握のもとに、欲求にマッチした企画を提起することである。去年やったから今年も……では、能がない。第三は、その提起の具体的な方法の問題である。せつかくすばらしい企画を作り上げても、それを知らない学友が多くいるのでは話にならない。徹底した情宣活動が要求される。そして第四には、その企画に参加した学友が、クラスやゼミに戻った時、参加した時のことを多くの学友に楽しく語ってく

れるような企画を作り上げることである。……さらに、運動部と一般学友との日常的な連帯感のなさも、種々な学内大会を不盛況に終わらせているかもしれない。孤立した運動部とスポーツというスポーツを向く多くの学友。これでは、名大スポーツの前途も暗い。この断絶感は絶対に無くさねばならない。ヨット講習会に参加した一学生が、ヨット部へ入部を申しこんだ。バスケットボール大会でも同じようなことがあった。スポーツ人口の底辺での拡大は、運動部にとっても大切なことである。たとえ入部はしなくても、自分達を楽しませてくれた運動部の試合には、応援におこなってやろうという気持ちぐらいは生まれてくるだろう。……」

植田委員長は、体育会会員やそれ以外の学内外の理解があつてはじめて大学スポーツが成立しているということを感じていたようです。現在、大学のスポーツや運動を通じてお互いに気持ちの交流や、名古屋大学のアイデンティティが育まれているでしょうか。二一世紀の名古屋大学体育会の使命は、スポーツ・運動をとおして多様な感情、多様な価値観を持つ人々とのよりよいコミュニケーションができる人間をつくることではないでしょうか。

参考文献一覽

- 名古屋高等商業学校其湛会 『劍陵十周年史』（其湛会、一九三二年）
名古屋大学史編集委員会編 『名古屋大学五十年史 部局史一』（名古屋大学、一九八九年）

名古屋大学医学部名古屋大学史（医学部）編集委員会編『稿本 名古屋大学医学部百拾五年史』（名古屋大学医学部、一九八八年）

八高創立五十年記念事業実行委員会『八高五十年誌』（八高創立五十年記念事業実行委員会、一九五八年）

名古屋大学体育会『濃緑』（名古屋大学体育会、一九六三〜二〇〇〇年）

岸野雄三編著『体育史講義』（大修館書店、一九八四年）

加賀秀雄「わが国における太平洋戦争への道とスポーツの歴史的動向」（『東海保健体育科学』第二二号、東海体育学会、二〇〇〇年）

高橋義雄「国立大学スポーツ・運動施設における課外時間帯のマネジメント——名古屋大学を事例として——」（『総合保健体育科学』第二四卷、名古屋大学、二〇〇一年）

旺文社『大学スポーツオールガイド vol.1・vol.2』（旺文社、一九九九年、二〇〇〇年）

文部省生涯学習審議会「地域における生涯学習機会の充実方策について」（生涯学習審議会（答申）一九九六年）
文部省大臣官房文教施設部「国立大学等施設の整備充実に向けて——未来を拓くキャンパスの創造——」（文部省一九九六年）

著者略歴

高橋 義雄（たかはし よしお）

一九六八年、東京都生まれ
一九九八年、東京大学大学院教育学研
究科博士課程単位取得退学
現在、名古屋大学総合保健体育科学セ
ンター講師
専攻 スポーツ社会学

名大史ブックレット3

名古屋大学 スポーツの歩み

二〇〇一年三月三〇日 第一刷発行
二〇〇一年九月一〇日 第二刷発行

著者 高橋 義雄

編集発行 名古屋大学史資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
電話 〇五二（七八九）二〇四六

印刷所 株式会社 クイックス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九一〇
電話 〇五二（八七二）九一九〇



表紙写真：名大が主管した第28回国立七大学
総合体育大会開会式

七大学の学長が名古屋大学に集まる。